

## ◆謝罪と反省（ただし個人）

当然のことながら、過去それ自体は絶対に変えることができない。

変わるとすれば、過去についての認識や記述のほうである。全知全能ではない私たちは、可能な限りで、過去を知る。粘り強い探究の試みが、過去の新しい事実を教えてくれることがあり、過去の姿が変わってみえるようになることがある。それに応じて私たちは過去に対する価値判断や態度を変えることがあるけれども、過去そのものが変わるわけではない。

だから大事なのは、過去そのものではなく、過去を知ることで、さらにこれからどうするか、である。

今回は、それについて少し考えてみることにしたい。ただ、いきなり大きな「歴史」にはいかないようにしよう。個人を基準にした話、その過去との向き合い方から入りたいのである。糸口として、「謝罪」と「反省」（の区別）について考えてみる。

仕事柄、学生から彼らの様々な不手際について謝罪されたり、あるいは迷惑をかけたほかの誰かに対して必要な謝罪文の書き方についての相談をされたりすることがある。大きくいって、ルール違反やその一方的な放棄に関するものである。

そうしたとき、かれらは、私、もしくは先方がたいそう怒っていると思っているようだ。それはある意味そうなのだけれども、計り知れない怒りというわけでもない（だろう）。それにいちいちこだわったりするほど、暇ではないはずである。ただ、軽くパニックになっている彼らには、そう思えないようである。

怒っていると思っているためか、謝罪がピント外れにみえることもしばしばである。かれらの謝罪文あるいはその文案をみると、（実際にそう書かれているわけではないけれども、表現としては例えば）「海よりも深く反省し、」などということが書いてある。この地球上で、「海よりも深い」場所はそうはないのだから、そんな場所を形容する「深さ」ってどのようなものか、あるいはそもそも「深い」というのは、ある空間的な同一性を前提にしているはずで、それ「よりも」といえる境地とはどんな場所を指すのかしらと想像したりする。何かの物理的限界を突破したところにある反省だということなのだろうか……。

ともかく、謝罪文を書くときに気にされているのは、申し訳なさを表現する技法の巧拙のようである。謝罪の意を示し相手の怒りを解くための文飾を考えなければならないと思っているみたいだ。もちろん「海よりも深く」の表現からも想像できるように、残念なことに、その形容はあまりよくできたものではない。あるいは「海よりも深い」でなければ、「何卒、何卒～」と繰り返し書いてある。どこか時代劇風である。「平身低頭」を尽くして相手の許しを願っているのである。それも自由だろうが、このやり方だと、何らかの制度的な上下関係のある場合の謝罪のうち、例えば職位あるいは年齢で「下」の人への謝罪には使えない。そういう人は「下」の人に謝罪できない人になるのではないかと心配になってしまう。

そもそも「謝罪する」とは何をすることなのだろう。

それがよく分からないようなのである。そこで垣間見えるのは、謝罪に関わるかれらの恐怖だ。何をしたら謝罪ができたことになるのか、どこまで謝らせられるのか。「誠意をみせろ」といわれ、無限に謝罪を繰り返すよう追い込まれるのではないか、そんな恐怖である。なかには恐怖のあまり、謝罪せずに音信不通になってしまうこともあるわけである。

日本文化の過去に事例を探せば、究極の謝罪の表現のひとつに「切腹」があった。言葉に尽くせぬ謝罪の意を表現するために、自害するのである。なるほど切腹のしきたりをめぐっては、それが強制的なものや思いつきによるものではないことを示すための配慮に溢れている。環視のなか、端然とした姿で従容と「自殺」が遂行されていくが、もちろんそれは、対応する表現方法のない（この世のものとは思われない）謝罪の境地を表すためである。

少し大げさかもしれないけれども、「海よりも深いもの」を表現しようとする謝罪文に、「切腹」に繋がるものをみてしまう。相手を慰撫するに巧みな表現を思いつかない者が、無限の謝罪という恐怖に駆られ、それでいて謝罪を表現しなければならないとすれば、「切腹」するしかないということだったのではないか。

謝罪の意を示すのに、頭を丸めて「坊主」にするという手段があつて、さすがに自分は見ることがないけれども、テレビでは観たことがある。それは出家のメタファーなのだろう。示されているのは、かような仕儀に至った自らの人生のありかたを全て否定し、生まれ変わったかのように心を入れ替えること、である。表現として狙っているところは「切腹」と似ていて、そこでも、言葉にできなかった謝罪の意を「察してくれ」と言外に示す手段になっている。

切腹や坊主といった、謝罪の深さを示そうとする表現の数々がある。もちろん、すまないと思うこと自体はいいし、その思いのなかには、それを相手に必死にどう伝えるかという願いも含まれているだろう。そうした思いの存在を批判しているわけでない。そうした思いが、相手に対する感情移入、なによりも共感能力として必要であるし、そのことは原因となった自らの行為について被害者の側に立ってみることにつながる。謝罪から和解へのプロセスには不可欠だ。

ただそれは伝わりにくいものである。そして忘れてはならないのは、いくら詫びを入れたところで、過去を変えることはできない。こちらの「すまない」と思う気持ちの受け入れを始めの目標に置くと、「切腹」や「坊主」のような妙なことになりかねない。わかってもらおうという前提で意を尽くそうとするよりも、現実的にできることを優先することはできないだろうか。つまり、まず始めに着手すべきものは、「反省」である。

ここで「反省」とは、とにかくひたすら申し訳なきようにする、あるいは坊主にする、土下座をして涙を流す、というような心情的あるいは外見上のものではなく、つとめて科学的なものである。起こってしまったことはやはりどうしても取り返しがつかないし、（損害賠償ではなく）慰藉料<sup>いしや</sup>というのはどこか相場によって決められるものである。（例えば、

高すぎる慰藉料の支払いは、謝罪において別のメッセージになる場合がある)

過去は変えられないので、結局、残された「できること」は、反省を通じ、再発防止にいかに取り組むかだけになっている。本当に、それだけだ。そのために、その経緯を詳しく思い出すこと、原因と結果の関係を注意深く検討することが求められる。つまり、反省とは、いってみれば過去の自分の行動を引き起こした原因についての探求、つまり自分史に批判的検討を加えること、である。

そうしたとき、「このようなことを絶対に起こさないよう注意し、今後再発防止に努めたいと思います」と書いただけでは不十分だろう。求められているのは漠然とした「注意」ではない。「心構え」は文脈を離れると抽象化しやすいし、その根拠となる文脈が薄ければ、たちまち忘れ去られるものである。その時にはすでに、それは空念仏である。原因を特定できれば、むしろ問題は「心がけ」に関するものではなく、ある特定のやり方、自分が定めたシステムによるものかもしれないのである。

そう考えると、反省による自分の過去のチェックとは、生まれ変わることでできないこの世界で生きて行くことにおいて、自己同一性の維持に関わる重要な作業だということだ。反省をきちんとできるということは、切腹や坊主と違い、自分を尊重する行為なのである。

こうしたことを言うと、学生たちは少し安心した気持ちになるようだ。再発防止策、それも厳しい検討を経た防止策を考えること、それを相手に示すことができれば、それは最低限必要な謝罪になる、というとその作業に熱中するようになる。(物わकारの良い学生に囲まれて、私は幸せである)

付け加えておくと、それで納得しない相手には、謝罪や和解は諦めるしかない、とも言っている。感情的な慰藉に関しては、当事者それぞれにもコントロール不可能なものをたくさん含んでいるからだ。決してこちらからそれを言うてはならないけれども。

時に過ちをおかすこともある私たちにとって(それは私たちが「自由」だということでもある)、反省というのは、自己同一性の維持にとって、重要な作業である。過去の自分の振る舞いや判断の(全部ではなく)一部を否定し、「幹」を作り直す。これはむしろ自尊心のある人にしかできないことである。過去より受け継がれたものを尊重し、その動かし難さを自覚している態度にある人ほど、反省を大事にし、そうした人々の同一性はさらに強化されてゆくだろう。

では、過去のチェックとは、どのようなものなのか、以下では少し考えてみることにしたい。